

両点本節用集の成立をめぐる

米谷隆史

一 はじめに

慶長年間に刊行された易林本節用集は、楷書体に片仮名の付訓という形式であったが、寛永年間以降の節用集では、付訓も平仮名が一般的となり、見出語の掲出も草書体の左に楷書体を並置する真草二行形式が中心となっていく。これらの改編に引き続いてなされたのが、楷書体の傍らにイロハ分類の見出しとなる語形とは別の音訓を付す両点形式の採用である（以下、両点形式を採る節用集を両点本と総称する）。本稿では、両点本の編纂に際して、いかなる資料が参照とされたのかを調査し、両点本成立の背景やその意義について考察することにする。

二 初期の両点本諸本とその先後関係

両点本における楷書体への付訓は、例外もあるが、見出語で当該漢字を字音で読む場合は和訓が、和訓で読む場合は字音が付される。楷書体に対する左右の位置は節用集に

よって異なっているが、見出語形を示す草書体への付訓に対しては常に左に位置することから、本稿では楷書体への付訓を一括して左訓と称することにする。なお、見出語形とは別の音訓を見出語の左に付すことは、易林本節用集や元和版下学集、真草二行形式の節用集では寛文一〇（一六七〇）年刊行の頭書増補二行節用集等でも行われており、古辞書においては珍しいことではない。しかし、これらの辞書に見られる例は極めて部分的であるため、それらを以て易林本節用集等を両点本と称するのは躊躇されるところである。ここでは、見出語の漢字のほとんど全てに左訓を付しているものを両点本と称して調査対象とすることにした。

両点本の成立については、佐藤（二〇〇〇）が、節用集と倭玉篇という漢字へのアプローチを異にする辞書の融合が図られた事例として注目しており、関場（一九九四）や高梨（一九九二）（一九九七）などにも言及が存する。それ

らを踏まえつつ、初期の両点本の諸本や形態について概略をまとめておく。

初期の両点本には、次の書名を有する三類が存する（書名は内題、以下も全て同じ）。

A類 真草二行節用集

B類 頭書増補二行節用集

C類 頭書増補両点二行節用集

A類は、高梨（一九九六）（一九九七）が「無刊記両点版」とするものである。高梨（一九九七）によると、「無刊記両点版」は、寛永一六年（一六三九）刊行の真草二行節用集の辞書本文をほぼ忠実に受け継ぐものの、「寛永十六年版では、〈博陸〉の項目の〈博〉字に対する楷書体が〈轉〉となっているが、無刊記両点版では、これを〈博〉に改め」るような訂正例が見られ、それは、両点形式を採ること、「おのずと各項目の漢字見出しの一字ごとに対する確認がおこなわれ」たことに拠るものとしている。A類は、刊年不明の一本が知られるのみであるが、B類やC類と比較すると古い辞書本文を受け継ぐものである。

B類とC類については、高梨（一九九二）が次のような点を明らかにしている。

○B類の辞書本文は、寛文一〇年刊行の頭書増補二行節用集に代表される七行七九枚本の節用集に拠っている。

○C類の見出語は、一部の乾坤門と言語門に集中的に存する増補を除けば、B類と大きくはちがわない。

○確認できる範囲では、B類は延宝七年（一六七九）刊本、C類は延宝四年刊本が最も早い刊年を有する。^{（注1）}

○C類の見出語はB類に拠っている可能性が高く、その場合、B類に延宝四年以前の刊本が存在したことを仮定しなくてはならない。

以上をまとめると、B類とC類の關係に問題を残すもの、次のように、A類↓B類↓C類の先後關係が想定されることになる。

刊年

辞書本文の典拠

A類 不明 寛永一六年刊真草二行節用集

B類 延宝四年以前？ 寛文一〇年刊頭書増補二行節用集

C類 延宝四年？ B類の節用集

本稿では、管見で最も早い刊年を有する、次の節用集によつて各類を代表させる。

A類 無刊記本（以下、A）^{（注2）}

B類 延宝七年（一六七九）刊本（以下、B）

C類 延宝九年（一六八二）刊本（以下、C）

B類とC類については初刊本とすべき節用集を参照できなかったため、先後關係についての最終的な判断を下すことはできないが、左訓が関わる事例からいくつかの判断材

料を示しておくことにしよう。挙例にあたっては、見出語は楷書体の字形が示す漢字に拠って引用することとし、割書は（～）内に、左訓は《》内に示す。また、対応する左訓が見られない場合は「φ」を示した。

三本の見出語の漢字や左訓は共通するものがほとんどであるが、次のように相違する例も存する。

① A 素《しろし》
イ言語

B 奈《しろし》
イ言語

C 奈《なんぞ》
イ言語

② A 楼客《たかどの／さしをく》
ロ乾坤

C/B 楼閣《たかとの／さしをく》
ロ乾坤

①②は、楷書体の字形が示す漢字がAとB・Cで異なる例である。三本とも草書体の字形からは、「素」と「奈」、「客」と「閣」とを判別するのは困難である。①の場合、「見出語形の「いかん」に対応する漢字としてはB・Cの「奈」が適当であるが、左訓「しろし」が付される漢字としてはAの「素」が適当である。②の場合は、見出語に対応する漢字としても、左訓「さしをく」が付される漢字としてもB・Cの「閣」が適当である。

①②とも、AとBの掲出字形は、それぞれが拠った寛永一六年刊真草二行節用集と寛文一〇年刊頭書増補二行節用集の掲出字形を踏襲したものである。しかし、①はAの左

訓をBが転載した例と、一方の②は逆にBCの左訓をAが転載した例とするのが考えやすい。①と②は正反対の先後関係を示すことになるのである。

さらに、次のように、三本ともに不適当な漢字を示している例もある。

③ C/B/A 論近《あらしふ／たくみ》
ロ言語

④ C/B/A 晁玄《あさける／くろし》
ロ言語

③④では楷書体が示す漢字は本来あるべき「匠」「言」ではなく「近」（実際は「近」の上に横棒が一本ある字形）「玄」となっている。このこと自体は、①②と同様、典拠となった真草二行節用集と頭書増補二行節用集の掲出字形が共に「近」「玄」となっているのを踏襲したものである。ただし、③は付訓や注文を参考にしたためか、本来あるべき「匠」に対応する左訓が示されている。したがって、③は、最初に左訓を付したのがいずれの節用集であるにせよ、左訓は本来の漢字を想定して付したものの、楷書体の字形を校訂するまでには至らなかった例ということになる。一方、④はいずれの節用集でも「玄」に対応する左訓が示され、本来あるべき「晁言」が想起されることがなかった例ということになる。③④のように、左訓を付す行為が辞書本文の校訂に十分繋がっていない例が混在するという状況

では、①②のような例から単純に先後関係を判断することはできないことになる。

ただし、次のような例を見ると、先学の想定と同じく、A↓B↓Cの成立順序が妥当のように思われる。⑤⑥は、AがB・Cに先立つことを示す例である。

⑤ A 異體《ことなる／たい》(「異」を頭字とする三語省略) 一口同音《ことにし／おなしうす／こゑを》

B 一言《ゆ／ことは》 一口同音《ことにし／ゆ／おなしうす／こゑを》

C 一言《ゆ／ことは》 一口同音《ゆ／くち／おなし／こゑ》

⑥ A 一会《ゆ／あふ》 一回《ゆ／めくる》

C/B 一会《ゆ／めくる》 (九語省略) 一回《めくる》

⑤は、「異」を頭字とする語群を類聚する部分である。Aでは「一口同音」の「一」を承ける漢字として「異」が自然に想定できるのに対し、B・Cでは、見出語の語順に乱れがあるため、このままでは「一」を承ける漢字が「一」となってしまう。このこと自体は、寛文一〇年刊頭書増補二行節用集の辞書本文に由来する誤りであるが、「一」に対応する左訓が「ことにし」となってしまうのは、Aの左訓

を機械的に転載したことで、生じた誤りといえる。Cに左訓「ことにし」がないのは、この不自然を解消したものでいえるであろうか。また、⑥は、Aのように「あふ」とあるべき「会」の左訓を、誤って一語下の「回」から転載してしまった例であろう。

⑦⑧は、BがCに先立つことを示す例である。

⑦ A 一姓《ゆ／タク》(香)

B 一炷《ゆ／もへくい》 タク《香》

C 一炷《ゆ／もえくい》(香)

⑧ A 一冊《ゆ／あむ》(書籍)

B 一冊《ゆ／ふだ》 あむ《書籍》

C 一冊《ゆ／ふだあむ》(書籍)

⑦⑧のように、Bには、全体に亘ってわずかではあるがAが掲出する以外の左訓を添加している例が見られる。これらは、Aの左訓に、Bが拠った寛文一〇年刊頭書増補二行節用集の「一炷《ゆ／もへくい》」「二冊《ゆ／ふだ》」という左訓を併せて転載したものと考えられる。⑦は、頭書増補二行節用集から転載した左訓のみをCが引用した例であり、⑧は、Aと頭書増補二行節用集の双方から転載した二つの左訓を、Cが一統きの語として引用してしまっただろう。

以上の例から、管見諸本の範囲では、A類↓B類↓C類

の成立順序を想定するのが適當であろう。したがって、以下では、A（以下、無刊記両点本と称する）の左訓について検討することにする。

三 無刊記両点本の左訓の典拠

三―一 無刊記両点本の見出語と左訓

多くの漢字に音訓を付す際には、自明の字音や和訓が存在する場合はそれを付し、適当な字音や和訓を想起することができなかつたり、記憶が不明瞭な場合には、字書等を参照して付すという過程が想定される。その際、概して字音よりは和訓を付す場合のほうが、字書等を参照する頻度は高かつたものと予想される。そこで、見出語が字音語に限られることで、左訓としては和訓を付すことが多くなる口部を調査対象として、左訓と字書諸本との関わりを確認していくことにする。

無刊記両点本の口部において、和訓で左訓を付してある異なり漢字数（同じ漢字でも左訓が異なる場合は別に数える）は四七字である。まず、この中から字書等に拠らずに付した可能性が高いものを除く必要がある。個々の和訓について、それが編纂者にとつて自明であつたか否かを選別することは極めて困難であるが、無刊記両点本の辞書本文に見出語として存する和訓であれば、編纂者の記憶に存し

た可能性は高いであろう。⑨に示したのは、口部の左訓中、無刊記両点本の見出語や見出語の一部に一致する語が存するものである。

⑨路《みち》次《つぎ》頭《かしら》客《さしをく》

門《かど》籠《こもり》漏《もるゝ》刻《きさみ》

位《くらい》親《おや》根《ね》塵《ちり》

識《しる》通《とをる》櫓《やくら》鏤《チリハム》

緑《みどり》青《あをし》近《ちかみ》談《かたる》

語《かたる》人《ひと》所《ところ》露《つゆ》

頭《あらはる》命《いのち》哢《あさける》

引《ひく》脱《ぬくる》居《いる》舍《いる》

齊《とき》録《しるす》

右の三三例の一致例には、仮名遣や語形の小有、「哢《あさける》」に対する「嘲哢」(ア部言語)のような熟字訓に対応するものも広く含めている。口部の場合、無刊記両点本の見出語の和訓を援用することで七割ほどの左訓を付すことが可能ということになる。残る一四例の左訓が字書諸本との比較対象である。

三―二 字書諸本所収の和訓と左訓

無刊記両点本の見出語とは一致しない一四字の左訓には、字書を参照して付したものが含まれている可能性が高いこ

とから、これらについて、同時代の字書諸本との比較を行うことにする。

特定の漢字に付す和訓を求めるのであれば、音引の字書ではなく、部首や画数を手がかりにして検索できる字書を参照した可能性が高い。簡便なものとしては、見出字と音訓を示すのみの倭玉篇や字集便覧のような字書がある。また、漢文の注文が主ではあるが、付訓も少なからず見られる大広益会玉篇や字彙の和刻本が参照された可能性も否定できない。部首や画数による配列を探る字書に限っても、無刊記両点本刊行の下限である延宝年間までに刊行されたものは多数にのぼる。現時点では全ての字書の和訓を精査して対照する準備がないため、分類配列上の特徴が存する次の諸本を選んで比較調査を行うことにした。

- G 1 大広益会玉篇 寛永八年(一六三二)刊
- G 2 大広益会玉篇 寛文三年(一六六三)刊
- G 3 新刊大広益会増修玉篇 寛文四年(一六六四)刊
- g 1 玉篇 慶長一〇年(一六〇五)刊
- g 2 倭玉篇 慶長一五年(一六一〇)刊
- g 3 倭玉篇 寛永四年(一六二七)刊
- g 4 袖珍倭玉篇 寛文四年(一六六四)刊
- g 5 増字倭玉篇 寛文一〇年(一六七〇)刊
- J 字彙 寛文一一年(一六七二)刊

j 字集便覧 承応二年(一六五三)刊
s 韻会捷見 寛文一一年(一六七二)刊

G 1、G 3の三本は漢文の注文を主とする玉篇で、G 1とG 3は和刻本である。G 1が五四二部首の一般的なもので、G 2は日本人が字彙の形式に倣って二一五部首(注5)に改編し、部首と各部首内の漢字配列を画数順にしたもの、G 3はG 1の五四二部首の後に雑字部を加えた五四三部首で、部首内の漢字配列を画数順にしたものである。三本とも注文自体は共通する部分が多いが、付訓には相違が見られ、G 3には見出字や注の改変や増補も存する。

g 1、g 5は所謂倭玉篇である。g 1は「夢梅本」と称され、一九七部首(各部首内部の「附部」を加算すると五〇五部首)、倭玉篇の中では漢文の注文を多く残す一本である。g 2は、以降の倭玉篇の元となったもので、四七七部首。g 3は、g 2のような倭玉篇を大広益会玉篇の形式に合わせて五四二部首に改編したもの、g 4は五四二部首のまま、部首内の漢字配列を画数順にしたもの、g 5はg 3のような分類配列に従うが、漢字配列を画数順にした字書から増補した見出字を各部首末に加えるものである。

Jは字彙の和刻本である。(注6)二一四部首で部首と部首内の漢字配列を画数順にする。jは、一見すると倭玉篇と同じ体裁であるが、外題を和字彙とすることから知られるよう

⑩は、表に示した中では唯一、倭玉篇のみと一致する例である。jにも和訓が掲出されていることから、g2に掲出の和訓を左訓として引用した理由を検討する必要がある。なお、一例のみであることを重視すれば、編纂者の記憶にあった和訓を付したものと考える余地も存するかもしれないが、無刊記両点本の他の部の左訓にも、g2以下の倭玉篇のみと一致する例が少なからず見られることから、この例も、いずれかの倭玉篇が参照されたことを示す事例と考えておく。

⑪囉齊ろさい《うたふ／とき》

g2 囉ラ《スガナシ タマス》
口言語
ロ五十二

J 囉ラ《…歌助声又小兒語也…》
口部

j 囉ラ《歌助声》
口部

s 囉ラ《…ラ ウタ》
二十二画部

⑫碌々ろくろく《あをいし》
口言語

g2 未掲出

J 碌ロク《…碌碌石也広韻多^キ石貌又石青色》
石部

j 碌ロク《…碓 イシ アライシ》
石部

s 碌ロク《…リヨク アライシ…コイシ》
十五画部

⑬瘦ろ《まかりせなか》
口支体

g2 瘦ロ《セコグマル ヤスル》
广百卅七

J 瘦ロ《…痾瘦曲脊…説文頭腫也》
广部

j 瘦ロウ《マカリセナカ カシラハル、》
广部

⑭轆轤ろくろ《みつくむぎ》
口器財

g2 轆ロク《同上(ロクロ)》
車二百四十九

J 轆ロク《…轆轤井上汲^レ水木…》
車部

j 轆ロク《…轆 ミツクムギ》
車部

⑪～⑭は字彙系統の字書に一致を見る例である。四例とも、jが掲出した和訓や注文を、無刊記両点本が左訓として引用したと考えるのが穏当であろう。Jの漢文の注から直接に無刊記両点本の左訓が導きだされたという可能性も否定できないが、その場合、jの和訓が無刊記両点本の左訓と一致することの説明がつかなくなる。なお、⑪⑫ではsの和訓も一致しているが、全体から見ると、sが参照されたことを積極的に裏付ける証拠は見出しがたい。

⑫と⑭は、g2が当該の漢字を収めていない例と和訓を掲出していない例であることから、jの和訓が左訓となっていることに問題はない。一方、⑪と⑬はg2も和訓を掲出しているため、先に見た⑩と同様に、一方の字書の和訓を左訓として選んだ理由を検討する必要がある。いずれかの字書を主とするという意識があったのか、両書が掲出する和訓の適否を判断した上で引用したのか、単に時々で早く検索できそうな字書の和訓を引用したのか等、いくつかの可能性が考えられるが、この問題の解決にはもう少し

広い範囲の調査が必要である。後考に期したい。

以上、極めて範囲を限定した上での調査ではあるが、無刊記两点本の編纂者は、jの字集便覧とg2以下の倭玉篇のような字書とを参照しながら左訓を付していったと見てよいであろう。このことから、無刊記两点本は、字集便覧が刊行された承応二年（一六五三）以降に編纂されたということになる。

四 まとめ

無刊記两点本が編纂された一七世紀後半には、なお、旧来の配列に従う大広益会玉篇や倭玉篇が広く行われていた。しかし、多くの漢字に和訓を付す必要が生じた場合、手に入れることが可能であれば、部首や部首内の漢字を画数順に配列する字書を参照するのは当然の選択であろう。逆にいえば、漢字を容易に検索できる字彙や字集便覧の刊行が两点本編纂の契機になったといえるのかもしれない。

最後に、一七世紀後半刊行の、左訓を大部分の見出語に付す辞書について付言してまとめとする。

两点形式の字書集としては、寛文六年（一六七六）刊行の真草下学集が存する。山田（一九六八）が掲げる図版（元禄八年の後印本）によれば、左訓が全て片仮名で、楷書体の右に位置すること以外は、無刊記两点本に近い体裁

となっている。この本は未見であるため、無刊記两点本との関係については今述べることができない。

両仮名雑字尽は、節用集と同様にイロハ分類を採る字尽的な辞書である。酒井（一九八六）は、万治二年（一六五九）の刊記を有する松會版のほか、刊年は未詳ながら、松會版に先立つと見られる水田甚左衛門版について言及しており、初刊は明暦年間（一六五五〜五七）頃と推測している。これは、本稿で推定した無刊記两点本の刊行年の上限よりも遅いため、両者の先後関係は現在のところ不明とせざるを得ない。^(注10)ただし、節用集の多くが两点形式を採るようになる以前に、両仮名雑字尽が広く流布していたことは注目すべきであろう。两点形式の有用性が両仮名雑字尽のような辞書の流布によつて認知されていた可能性は否定できないのではなからうか。節用集との影響関係の有無や先後関係については、両仮名雑字尽の見出語と左訓がどのようにに成立したのかという問題と併せ、今後の課題としなければならぬ。

本稿で明らかにした、两点本編纂時における字書諸本の使用は、佐藤（二〇〇〇）が言う「節用集と倭玉篇の融合」というアイデアの醸成を編纂過程の面から裏付けたものといえる。近世初期の字書諸本は、節用集と合刻されたり、節用集の見出語や注文の増補資料とされたりしてきた。

しかし一方で、乾（一九九九）のように、両者の間に掲出字形の差異が見られることを指摘する論もある。一七世紀後半は、字書の世界でも、玉篇系統に加え、字彙系統の字書の台頭が目立ってくる時期である。この時期の節用集や下学集、両仮名雑字尺等が、字書諸本といかなる関係を持ち、かつ、いかなる距離を保って変遷していったのか、今後も様々な面から検討を加える必要がある。

注

- (1) 延宝四年刊本は未見。ただし、閑場（一九九四）は、「二行「两点」と称する「増補頭書两点二行節用集」が、延宝九（一六八一）年迄に出され」（二〇〇頁、傍点は筆者）として、C類に延宝九年以前の刊本が存在したことを示唆している。また、本稿でC類の代表として引用する延宝九年刊本は江戸版であるため、先行する上方版が存在した可能性がある。なお、国立国語研究所蔵の増補頭書两点二行節用集は、目録で延宝四年刊行とされるが、刊記がないため、その根拠は不明である。
- (2) 高梨氏が「無刊記两点版」として参照した成城大学図書館蔵本は未見のため、拙蔵本に拠る。高梨氏によると、成城大学本は、寛永一六年版の真草二行節用集と比較すると、先述の「博陸」の訂正以外にも、メ部の気形門の表示が二語分下に存する等の違いが存するという。拙蔵本はそれらの違いをいずれも充たし、行幅等、その他の特徴も共通しているこ

とから、同一の版、乃至はそれに準ずる位置にある節用集と考えて問題はないと考える。

- (3) 先述のように、寛文一〇年刊頭書増補二行節用集にもわずかながら左訓は見られる。

- (4) Bの左訓のうち「ふだ」は楷書体の右側に、「あむ」は左側に位置しているため、一続きの語でないことは明らかである。

- (5) 後述のように字彙は二四部首であることから、G2は字彙と完全に同じ部首立てになっているわけではない。

- (6) 字彙は慶安元年の和刻本を調査することができなかったため、影印本が存する寛文一一年刊本に拠った。字彙は拙蔵本に拠って、頭書増注本を含む他の三種の和刻本（いずれも無刊記）も調査したが、寛文一一年刊本が最も付訓が多く、無刊記两点本の左訓との一致例も多い。

- (7) ここで述べた字書諸本の概略は、岡井（一九三三）（一九三四）、岡田（一九四〇）、林（一九八九）、山田（一九五四）に拠るところが多い。

- (8) 「驢《おそむま》」の左訓は現在のところ典拠未詳であるが、g2・g3・g5では、「驢」の直下に位置する「驚」に「ヲソムマ」の訓が見える。

- (9) 例えば、無刊記两点本のイ部の左訓では、g2以下の倭玉篇に見られ、jに見られない左訓が「維《コレ》」等、少なくとも七例は存する。

- (10) 両仮名雑字尺の口部で左訓を有する異なり漢字数は二三字、うち、一四字の左訓は無刊記两点本と一致する。また、三一二で表に示した一四字と共通する漢字は二字であるが、

その左訓は「論《ことほる》」「囉《もろふ》」であつて無刊記両点本とは一致しない。ちなみに、前者の和訓は、倭玉篇類には見られるが、字集便覧には見られない。後者の和訓は、仮名文字遣や節用集類には見られるが、管見の字書類には見られなかつた。

○本稿で参照した節用集や倭玉篇諸本は、文中及び左に特記するもの以外は、市販の影印本や亀田文庫のマイクロフィルム所収の本文に拠っている。

大広益会玉篇（寛文三年刊） 拙蔵本

新刊大広益会増修玉篇 大阪府立中之島図書館蔵本

韻会捷見 山口大学棲息堂文庫蔵本

両仮名雑字尽（水田版） 石川県立歴史博物館蔵本

参考文献

乾 善彦（一九九九）「書体と規範―近世の漢字字体意識の側面

―」（『国語学』一九九）

岡井慎吾（一九三三）『玉篇の研究』東洋文庫

岡井慎吾（一九三四）『日本漢字学史』明治書院

岡田希雄（一九四〇）「寛永版真草倭玉篇攷（上）（下）」（『書誌学』

一四一三・一四一四）

酒井憲二（一九八六）『両仮名雑字尽』の版種」（『国語史学の為

に 第二部古辞書』笠間書院）

佐藤貴裕（二〇〇〇）「節用集の世界 典型と逸脱」（『月刊しにか』

一一―三）

関場 武（一九九四）『近世辞書論攷 早引・往来・会玉篇』慶應

義塾大学言語文化研究所

高梨信博（一九九二）「近世前期の節用集―四七部非増補系諸本の

系統関係」（『辻村敏樹教授授古稀記念 日本

語史の諸問題』明治書院）

高梨信博（一九九六）『真草二行節用集』の版種」（『国文学研究』

一一―九）

高梨信博（一九九七）『真草二行節用集』諸本の本文と性格」（『早

稲田大学大学院文学研究科紀要』四二）

林 義雄（一九八九）「日本の字典 その三」（『漢字講座二 漢字

研究の歩み』明治書院）

山田忠雄（一九六八）『元和三年版 下学集』新生生社

山田忠雄（一九五四）「本邦辞書史概説 附表 ―金玉篇から漢

和辞典へ―」（『国語学』三九）

米谷隆史（一九九七）「元禄期の節用集について」（『語文』六九）

○本稿は科学研究費補助金若手研究（B）「近世前期刊行の字書諸本に関する基礎的研究」（課題番号一六七二〇一〇九）の研究成果の一部である。